

9月号が発行出来ませんでしたので、10月号に2回分をお送り致します。

10月に入って志賀の山々が少しずつ秋色に染まり始めました。今年は9月に入って暖かい日が続いたせいか、紅葉は少し遅いようです。

1号より連載して参りました「一の瀬の歴史1」は、今号で終わりとなります。ご愛読ありがとうございました。

次号からは、別のテーマでお送りする予定です。



「清流を永遠に」の碑



一の瀬污水处理場



小雑魚川の岩魚



皆さんへお願いしたいこと

私たち湿原の植物やイワナは氷河期以来この川辺で生活しています。まわりには、ミスバショウ・クルママリ・ミスギク・アヤマなどの約300種類の仲間が住み、にぎやかな住まいでした。ところが昭和十八年頃から周辺に林道が開き、その後スキー場や旅館が建ち並んで、大勢のお客様が来るようになります。汚い水がこの小雑魚川にも流れ込んで、昭和40年頃には、私たちが住めない川になったり、周辺の開発が進むと私たち湿原の植物の住まいが乾燥化して、外国生まれの植物たちが私たちの住まいを脅かすようになったり、今日までに色々な困難がありました。

そのたびにこの川の近くに住む志賀高原漁業協同組合の皆さんや、一の瀬旅館の方々が、こんな私たちの住まいをみかねて、昭和51年には周辺にさきかけて汚水処理施設をつくってくれたり、ここ奥志賀の川の工事をするときには、地元や業者の方々が私たちイワナを工事の影響のない下流に引越してくれたり、湿原の乾燥化を防ぐために、地元の雑魚川浄化対策委員会の方々が中心となって、町や県によびかけてくださり、公共事業として、川の嵩上げをしてくれたり、そんな方々の暖かい手によって私たちは今日まで守られてきました。開発は進んでも、人間さまと私たちが共存していけることは、とても素晴らしいことだと思います。この下流には二百万人近い人達が生活しているそうですが、私たちが住めないような水辺になるということは、この人達にとっても大変なことだと思えます。

皆さんにお願いしたいのは、こんなに多くの方々を守っていただいた私たちの住まいを踏み付けたり、石を投げ込んだり、タバコのすいがらや、ゴミを捨てないでいただきたいということです。どうか、人間さまより弱い私達を、皆さんの暖かい手で守ってあげてください。お願いします。

人間さまへ

シガアヤマとイワナより

一の瀬の歴史1-4

小雑魚川に建つ「シガアヤマと岩魚より人間様へ」の立て看板

Yさんは思いました。污水处理場が出来たが、果たして30ppmの基準で岩魚たちが戻ってくるだろうか？

Yさんは、ほぼ決まり掛けていた設計のやり直しと、より高い基準5ppmを、一の瀬の処理場建設委員会に求めました。数ヶ月後、漸く要求が通り、山岳観光地としては、日本初の高基準の処理場建設が決まりました。

昭和51年、ついに一の瀬污水处理場が完成致しました。総工費3億6千万円。地元負担は3億円。一の瀬の水は高いと言われる所以です。完成後、検査に来た県の係官も1000ppmからの汚水が5ppmになったデータと臭いもない、きれいな水に驚嘆して帰ったそうです。

小雑魚川は、少しずつ元の清流に戻りはじめました。しかし、その進捗はゆっくりで思うようには進みません。雨水の流れを無視したスキー場開発による土砂水の川への流入と、鉄砲水による流れの直線化は、SS濃度が上がり、湿原を乾燥化させました。又駐車場に溢れるごみが川を汚し、そして、旅館での重油給油時での油漏れ事故と、処理場の建設だけでは中々川はきれいになっていきません。

そんな状況下、Yさんは次の行動に出ました。スキーコース開設へのアドバイス(表土復元方式)、油事故への対応は一の瀬地区全員でと言う指導(全体責任)。こうしたYさんの指導に皆直ぐに反応し、対応致しました。

これは、一の瀬の皆さんの自然に対する考え方が変わってきた証であり、昭和53年頃からは、自発的に駐車場や街中のごみ拾いが行われるようになりました。又、私のために公を犠牲にしてはならないというYさんの教えから、玄関前での路上駐車禁止、街中の観光バスの一方通行化、及び観光バスのごみ持ち帰り等、一の瀬が地域全体で、環境整備に向けて自らの意思で行動しはじめたのもこの頃からです。Yさんと一の瀬の人達との間で信頼関係が生まれたのもこの頃からです。この頃から一の瀬の人はYさんを「おやっさん」「おやじ」と呼ぶようになり、何か問題が生じた時相談に行くようになりました。

小雑魚川の河川改修による岩魚の引越しや、在来植物保護のための帰化植物の駆除等、ありのままの自然を少しでも残そうと、より活発な活動が一の瀬の中に見られるようになりました。

そして、一の瀬の皆さんの横には、その活動に時には反対することがあっても、以前とは違った、暖かい目で見つめるYさんの笑顔がありました。

今、一の瀬の皆さんは、原種岩魚が棲み、清流の流れる小雑魚川と周りの湿原を地域の財産として、今後もその環境保全をしっかりとやって行こうと考えております。

Yさんがいつも口にしていた言葉を紹介致します。

「プライベートなことでパブリックを犠牲にしてはならない。」

「人に逆らっても、自然には逆らうな」

Yさんは、地元の半世紀の悲願であるオリンピック招致に奮闘し、競技場である焼額山スラロームコース開設ではアドバイザーとして、又オリンピック道路建設工事でもアドバイザーとして、要壁を石垣作りにする等、多くの功績を残しましたが、本番のオリンピックを見ることなく闘病生活の末、平成10年2月、長野オリンピック閉会式の2日後に他界されました。

Yさんの考え方は、今、一の瀬の人達に確実に受け継がれ、水や自然を大切にしている心が根付いております。

完

今回の連載に当たっては、Yさん＝山本教雄氏が書かれた「人に逆らっても自然に逆らうな」-山本小屋からのメッセージ、一の瀬共同污水处理施設組合史、志賀高原の自然誌を参考にさせて頂きました。

(児玉)

(参考)原種岩魚とは、元々、山奥の清流に棲む岩魚で、他の遺伝子が入っていない岩魚を言う。小雑魚川の岩魚が原種と言われる理由は、DNA鑑定の結果、黒部川や奥只見、北海道の岩魚と同じDNAであったことが上げられる。小雑魚川には1㎡で1匹と大変な数の岩魚が棲んでおり、種類はニッコウイワナ、ヤマトイワナ、両者の中間種が夫々3分の1ずついるそうです。